

無量寿経の伝統における「願生」の探求

——「浄土真宗における祈り」を考察するための基礎的作業——

加 来 雄 之

(大 谷 大 学)

はじめに

浄土真宗の伝統的教学では、他力信仰の純潔性を強調するために、「祈り」を自力の願望をあらわす不純な信仰形態としてタブー視してきた。そのために多⁽¹⁾元的な宗教観がもとめられる今日の状況のなかで、他宗教の「祈り」に対してどのように関わればよいのか戸惑っているようである。祈りの頑な否定は真宗教団を孤立させかねないし、祈りの安易な肯定は真宗の他力信仰の教学的純粋性を失わせることになる、ということであろう。

まず祈りを否定するにしても肯定するにしても、「祈り」という概念を定義する必要があるであろう。

日本語の「いのり」の場合、存在根拠としての生命・靈魂「い」の根源性と、その根源からの言葉の発言「のり」という局面が顕著に窺える。⁽²⁾

私は、この棚次正和氏の定義によって、日本民族は、人間の普遍的な存在構造にもとづく生の発現、生の根本的態度、宗教的要求を「イノリ（生宣り）」という言葉に託した、と理解したい。ただ「イノリ〔ル〕」という態度そのもの

のは、神に祈ることも、仏を祈ることもできるのである。つまり「イノリ」「ル」とは、形式を表わすのであって内実はない。それゆえに問題は、日本民族がイノリという言葉に託してきた宗教的要求に対して、それぞれの宗教的伝統がどのように応えようとするのか、にある。そのとき忘れてならないことは、イノリという宗教的要求が人間の普遍的な存在構造に基づいているとしても、そのあり方は宗教的伝統のなかでどうしても批判的に問われなくてはならないということである。なぜなら存在の深遠性を隠蔽しようとする時代社会システムのなかでは、イノリは容易に人間的な欲望にすり替えられ、そのシステムのなかに取り込まれてしまいうからである。

無量寿経の伝統は、日本民族の「イノリ」という言葉に託された宗教的要求に対して、「イ（如来）」の「ノリ（名号）」として応答し、如来の名号によって実現する宗教的意欲を「願生」としてあらわしてきたのである。この願生の歴史的展開と受容を検討することによって、自力の願生をタブー視する、つまり第十八願を純粹な信仰、第十九・二十願を不純粹な信仰形態とするような、排他的な信仰理解を乗りこえる道を、また浄土真宗における祈りを考察する地平を、見いだすことができるかもしれない。

一 無量寿経の伝統における願生の展開

無量寿経の伝統における唯一の論である世親の『無量寿経優婆提舍願生偈』（以下『浄土論』）によれば、無量寿経の伝統は「願生」を根本命題とする。無量寿経には五つの漢訳が現存し、大きく初期無量寿経（『大阿弥陀経』『平等覚経』）と後期無量寿経（『仏説無量寿経』『無量寿如来会』『莊嚴経』）とに分けることができる。初期無量寿経では願生という主題を扱う箇所は三輩の教説だけである。それに対して後期無量寿経である『仏説無量寿経』では「願生」を⁽³⁾

主題とする教説が次の三箇所を展開している。

(ア) 念仏往生段 「仏告阿難。其有衆生〔…中略…〕諸有衆生聞其名号信心歡喜乃至一念。至心廻向願生彼国即得往生住不退転。唯除五逆誹謗正法」⁽⁴⁾

(イ) 三輩段 「仏告阿難。十方世界諸天人民、其有至心願生彼国。凡有三輩。〔…後略…〕」⁽⁵⁾

(ウ) 智慧段 「仏告慈氏。若有衆生以疑惑心修諸功德願生彼国。不了仏智〔…中略…〕謂之胎生。」⁽⁶⁾

それぞれの段落における願生の独自性を示すために、「至心廻向願生」「至心願生」「疑惑心願生」と呼んでおきたい。真宗の伝統的教義では、この三つの願生を、(ア) 第十八願の成就、(イ) 第十九願の成就、(ウ) 第二十願の成就に配当し、(イ)(ウ)の願生を自力として貶める。しかし、初期無量寿経では三輩段だけであつた願生の教説が、「仏説無量寿経」ではなぜ三つの教説として展開するのだろうか。その考察を通して、三つの願生の有機的な関係とダイナミックな構造を見出すことができるだろう。

「至心願生」

『仏説無量寿経』の三輩の教説は、初期無量寿経のそれに比べると、表現も整理され極めて簡潔である。またそれ以後の後期無量寿経では三輩の形式だけが残っているものの「三輩」という指示もない。このように考えると三輩という類型(types)を示すという関心がもっとも明確な無量寿経が『仏説無量寿経』であるといえよう。では願生するものを三種の類型に分けて記述するということはどのような意味があるのか。思うに、類型を設定することは、無数のあり方をもつであろう「願生」という現象をすべて例外なく包み、願生という概念に関わる諸要素を抽象し、そ

のことによって願生の本質を理解しようとするためであったといえよう。さらに三輩には、初期無量寿経の「三輩有り。作徳大小有りて転たあい及ばず⁽⁷⁾」という言葉がよくあらわしているように、単に類型だけでなく、上から下へとこの等級という関心が加わる。『観無量寿経』の九品に照すと、そこには絶望的な状況における衆生の願生に対する心配りがあり、そこにこそ三輩を説く本旨があるのである。

無量寿経の伝統において、この三輩の教説がもった決定的な意味は、宗教的生にとって絶望的な状況にあるものも、至心に願生すれば往生するということを明記したことであると思われる。その類型の原初的な意義をもっともよくあらわしているのは、初期無量寿経の三輩の教説であるが、そこでは疑惑するものも往生し、時期は異なっても阿毘跋致（不退転）の菩薩となり、仏となることが示される。この三輩の教説は、阿弥陀仏の国土のすぐれた特徴として、他方仏の国土に往生を願うものたちから深い感動と衝撃をもって受け止められたに違いない。このように三輩の教説は、単に往生の機を羅列するものではなく、むしろ曇鸞や法然が注目したように、三輩のすべてが平等に往生する真実の原理に目覚ませる方便の教説という意味をもったのである⁽⁸⁾。

このようにして、この衝撃的な教説は、至心に願生するものたちに大きな問いを投げかけることになる。すべての願生するものが往生するという、この三輩の教説をどのように受け止めればよいのか。その根源的な問いが初期無量寿経自身をも展開させたし、また浄土の祖師たちへの問いかけともなった。その問いかけは二つに整理できよう。

(一) 一つには、三輩すべてを往生せしめる願生の純粋な原理とは何か、という問いである。この問いが、本願成就文の「至心廻向願生」の教えを生み出す。

(二) もう一つは、願生を疎外する原理はなにか。またその疎外をどのように自覚的に批判し超えていくことがで

きるか、という問いである。この問いが、三輩のなかの疑いの問題を別立させ智慧段の「疑惑心願生」へと展開する。

このように三輩の教説に構造として内在する問いに、『仏説無量寿経』において願生の教説が三つの箇所に展開する契機を見出すことができる。つまり「至心願生」から願生の本質原理（純粹、法則、純粹経験）を抽出しようとしたのが「至心回向願生」の教説であり、そして願生を不純粹ならしめている疎外原理を見出して批判してゆくのが「疑惑心願生」の教説である、ということができるのではないか。

「疑惑心願生」

三輩の教説における「至心願生」は、三輩というさまざまな状況と機根を生きるものたちの意欲として語られている。その意味で、不純粹な人間的関心（自力）を含んだ概念である。その願生の不純性を「疑」として批判するため展開したのが「疑惑心願生」の教説である。もともと初期無量寿経においては、疑いの問題は三輩のなかの中輩と下輩において、「中悔狐疑不信」のものも往生する、というように付加事項（但し書き）的に説かれており、教説として独立していなかった。ところが『仏説無量寿経』では、その中輩・下輩に説かれていた疑いの問題が、胎生の因縁を問う形で「疑惑心願生」の教説として別に立てられ、疑いの内容が因縁として整理されてくる。そこでは「疑」とは、仏智に対する「疑惑不信」であり、「罪福を信じて善本を修習して」願生することであるとはつきり示される。⁽⁹⁾

また初期無量寿経では道中にある城に五百歳とどまるという喩えが、『無量寿経』では転輪王子の譬えという宗教的罪の苦悩を言い当てる印象的な譬喩として変容されて提示される。つまり化生に対する胎生という往生の純・不純の

問題として提起されてくるのである。願生における疑惑という問題は、初期無量寿経のような中輩下輩の願生における付加的な問題としてではなく、願生の疎外原理を抽出する教説として明確に独立する。その結果、「其れ菩薩有りて疑惑を生ずるものは大利を失す⁽¹⁰⁾」といわれるように、願生についての教誡という意味が強くなる。これらのことは、願生における疑いが、願生の構造的問題として批判的に理解されていくようになったことを示している。

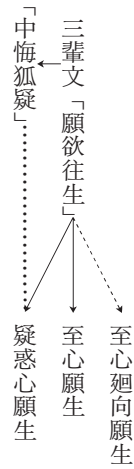
「至心廻向願生」

一方、その三輩の「至心願生」に内在する純粹な原理を説くために展開したのが本願成就文の願生、つまり「至心廻向願生」という教言であると受け止めることができる。願生の疎外されたあり方として「疑惑心願生」が見出されたことは、反転して三輩すべての往生を成り立たせる純粹な願生として「即得往生住不退転」させる「至心廻向願生」を見出すことになった。やがて親鸞は、そのような課題のもとに「至心廻向願生」を理解するために、「至心に廻向したまえり」と独自の訓みを与える。親鸞は「至心廻向願生」は「如来諸有の群生を招喚したまふの勅命」であるところの「欲生」の成就であるという。そのような願生は、個人の心理的意欲ではなく、哲学的にいえば、如来―内―存在という「存在論的構造の理解にもとづく普遍的な欲求」ということができる。この純粹なる願生の原理によって三輩の平等往生は成り立つ。「至心廻向願生」は、あらゆる衆生を往生の機として成就する普遍的な原理（真理）を語るのであり、決して「至心願生」のような諸状況のなかにおける有限な心理的意欲を語っているのではない。

以上、無量寿経における願生の教説の展開と、『無量寿経』の三つの願生についての言説の有機的關係を一応示すことが出来たかと思う。

『大阿弥陀経』

『仏説無量寿経』



願生の純粹原理の抽出

願生の類型

願生の疎外原理の抽出とその批判

二 曇鸞における願生の探究

『浄土論』は、「願生」こそ一切苦悩の衆生に無上仏道を成就する宗教的要求であり、その実現が無量寿経の伝統の主題であることを示した。その教示を受け止めたのが曇鸞である。曇鸞における三輩文への注目に視点を当てて、曇鸞における願生の探究について考察してみよう。曇鸞の浄土教についての三つの著述『無量寿経優婆提舍願生偈註』（以下『浄土論註』）、『讃阿弥陀仏偈』（以下『略論』）は一貫して『仏説無量寿経』によっている。従来、『略論』については議論があり、『讃阿弥陀仏偈』と一對のものとされ、また『論註』とは思想的齟齬があり、曇鸞の作ではないのではないか、という指摘もされてきた。しかも疑いに関してあれほど深い思索を展開する親鸞もまったく引用しない。ただ親鸞による法然の言行録『西方指南抄』には、曇鸞の伝記をあげて次のように記している。⁽¹¹⁾

仙経ヲ焼テ自行化他一向ニ往生浄土ノ法ヲモハラニシテ、往生論ノ注ヲ略論安樂浄土義ノ文ヲ造也。

このことは、親鸞が『論註』と『略論』とが「往生」という課題について、積極的側面（基礎づけ）と消極的側面（批判的反省）との両面から論ずる相互補完的な著述ではないかという見解を有していたことを示している。以下は、

この仮定に立って考察をすすめてみたいと思う。

『論註』における願生の基礎づけ

曇鸞は、「願生」が凡夫（一切苦悩衆生）の上に成り立つ宗教的意欲であることを証明するために、無量寿経解釈の方法として他力・自力のパラダイムという画期的な視座を提供した。つまり曇鸞は、五濁システムに囚われている凡夫に「願生」が成り立つ構造とプロセスを『願生偈』に学ぼうとした。そのときに曇鸞が注目したのが「至心願生」と「至心廻向願生」という二つの教説であったと思われる。曇鸞は『論註』のなかで願生についてさまざまな考察を行っているが、願生を基礎づけようとした意図がもっとも明瞭にうかがえるのが善巧摂化章の次の文である。

王舎城所説の無量寿経を案ずるに、三輩生の中に、行に優劣有りと雖も、皆無上菩提心を発さざるは莫し。〔…中略…〕是の故に彼の安楽浄土に生ぜむと願する者は、要す無上菩提心を発すなり⁽¹²⁾

曇鸞は、すべての衆生が平等に往生する証文を三輩往生の教説にもとめ、その往生の純粹原理を「発無上菩提心」として確かめる。ここには願生の純粹な原理を基礎づけようという曇鸞の課題がはっきりと見出せる。そして、一転して、

若し人、無上菩提心を発さずして、但彼の国土の樂を受くること間なきを聞きて、樂の爲の故に生ずることを願ずるは、亦当に往生を得ざるべし。是の故に、自身住持の樂を求めず、一切衆生の苦を抜かむと欲するが故にと⁽¹³⁾言えり。

と、願生を疎外するあり方を「為樂故願生」として指摘する。『論註』の構成では、この後、願生の純粹な原理であ

る「発無上菩提心」を、第六障菩提門、第七願菩提門、第八名義撰対と、「能く彼の清淨仏国土に生を得」させる「妙樂勝真心」まで展開させ確かめてゆく。また、上巻末に置かれる八番問答では、第十七・十八願成就文、つまり「至心回向願生」の一連の文を引用して「一切の外道凡夫人、皆、往生を得⁽¹⁴⁾」という。このように「願生」という主題からいえば、『論註』は、願生の純粹な原理を、つまり「至心回向願生」の本質を「無上菩提心」(妙樂勝真心)との関係において顯かにしようという課題をもった著述といえる。つまり三輩を平等に往生させる「至心願生」の純粹原理として「至心回向願生」を見いだしたのである。

一方『論註』は、願生の疎外態である「為樂故願生」の問題については、八番問答の第三問答において「唯除五逆誹謗正法」との関わりのなかで論じるが、十分に展開されているとはいえない。しかし、もし前述したように『論註』と『略論』とが、願生について相互補完的な位置づけをもつ著述であるとすれば、願生の疎外原理の解明については『略論』に譲ったと理解することが許されるかもしれない。

『略論』における願生の批判的考察

三輩段の「至心願生」と智慧段の「疑惑心願生」との関係を取り扱うのが『略論』である。『略論』は、その題名が示すとおり「安樂淨土」の意義を六つの問答を設けて簡明に論じる。最初の第一、第二問答では、安樂淨土が法藏菩薩によって衆生のために莊嚴された本願の世界であることを、経と『論』とによって押さえる。第三から第六問答までは、その淨土に衆生が生まれるための因縁を問題にする。とくに第三問答では、三輩という類型の意義を示し、「無量寿経の中には唯三輩有り、上中下なり⁽¹⁵⁾」と、淨土に生れる機類については三輩以外はないことを確認している。

例外は許さないのである。そしてその上で『大無量寿經』によって、三輩往生の因縁を、上輩五因縁、中輩七因縁、下輩三因縁とまとめている。先学には、第三問答から第五問答までは、往生の因縁をあきらかにするという見解も示されているが、素直に読むと、『略論』は願生の純粹な原理というよりも、むしろ願生における疑惑心という問題を際立たせてゆくような構成になっている。『略論』においては、『論註』のような三輩生に一貫する往生の原理を明らかにしようという意図を見出すことはできない。それゆえに「発無上菩提心」という語とくに注目することもない。そのことも『略論』と『論註』との矛盾点として指摘される点であるが、むしろここにこそ『略論』の独自の意義を見出せるのではないか。つまり『略論』が課題としようとするのはどこまでも「有一種往生安楽 不入三輩中 謂以疑惑心 修功德願生安楽（一種の安楽に往生をするもの有り、三輩の中に入らず。謂く疑惑の心を以て功德を修して安楽に生れんと願ぜん）」⁽¹⁶⁾という「三輩に入らない一種」であり、その「疑惑心願生」に焦点をあてることにこそある。また実際、第四問答以降はその疑惑心願生の「一種」のことが中心に論議が展開してゆく。

曇鸞は、三輩の教説には存在しない「疑惑心願生」の文を、智慧段から取意して中輩と下輩に引用する。しかも、それは二種の疑惑する機類を示そうという意図からではなく、次図のように「疑惑心願生」の問題を因と果に配当して示すためなのである。

中輩の一種 疑惑心願生の因（不了仏智、疑惑不信、信罪福修習善本）

下輩の一種 疑惑心願生の果（辺地・胎生・疑城）

ここに『略論』の疑惑心願生の扱い方の独自性がある。しかし、なぜ曇鸞は疑惑心願生の因果を中輩・下輩に配当しながら、しかも「三輩に入らず」というような、分りにくい表現をとったのだろうか。思うに、曇鸞が「疑惑心願

生」を三輩に組み込んだのは、初期無量寿経の三輩文がもった、至心に願生するものはすべて往生する、疑惑するものも例外ではない、というあの原始的な教説がもつ力強さを回復するためであったであろう。また、にもかかわらず「三輩に入らず」と語ったのは、願生における疑惑についての語りは、三輩と同じ次元の語りではない、ということを示そうとしたからではないか。端的にいえば「疑惑心願生」は、三輩における願生の原理を問い直させる語りなのであって、往生の類型についての語りではないということではないか。

曇鸞は、『無量寿経』の三輩段と智慧段の文によって、初期無量寿経の三輩の教説を復元・再構築した。それは、前述したように後期無量寿経において疑惑の問題が願生の疎外原理を明らかにするという明確な方向性に深く共鳴したからであろう。それはまた疑惑心という疎外原理を仏の五智を鏡として照らし出すためであったにちがいない。換言すれば、「至心願生」という三輩の教言は、疑惑心の問題を内に包むことによって、かえって仏智のはたらきを明らかにする教説として再構築されたのである。

『論註』では、三輩段の「至心願生」と「発無上菩提心」との語に注目し、本願成就文の「至心回向願生」によって願生の純粹原理を基礎づけた。それに対して『略論』では、三輩段の「至心願生」と智慧段の「疑惑願生」によって願生の疎外原理を批判的に考察する。無量寿経の伝統は、五濁システムのなかに住まう衆生に、どのようにして願生を実現するかという課題のもとに展開した、このように受け止めたのが曇鸞であるといえよう。

おわりに

無量寿経の伝統において「願生」を問うための根本教説は三輩往生の教説である。しかしそこに語られる「至心願

生」は「猶し水乳の如し⁽¹⁷⁾」というように、如来の名のりを聞くという真理の体験と迷いの心理とが水と乳のように一体となった、純粹と不純とを含んだ概念である。それが私たちに与えられた願生の現実である。この「至心願生」から願生の純粹な原理と疎外原理とを言い当てようとする課題が、願生の教説が三つに展開する意義なのである。曇鸞によってその意義が受け止められ、三つの願生の有機的関係が示された。親鸞の願生理解もこのような視点から理解されるべきである。そのことによって、「至心願生」「疑惑心願生」を不純粹な信仰形態として排除してゆく排他的な理解とは異なる、人間の普遍的存在構造に基づいたラディカルな願生理解が成り立つのではないか。

このような課題に立つとき、浄土真宗における祈りとは、教義的立場から祈りを肯定するとか、否定するとか、無視するという関心からなされてはならない。むしろ日本民族が「イノリ」という言葉に托してきた切実な宗教的要求に対して応えようとしている宗教的伝統の一つが浄土真宗であると理解し、またそのことによって宗教多元的な世界における浄土真宗独自の役割を見出すべきではないだろうか。そのとき曾我量深の「如来の祈り」という視点が一つの突破口を与えるかもしれない。

思えば、親鸞もまた「後世を祈」（恵信尼消息）⁽¹⁸⁾ という悲痛な要求に促されて師源空に出遇うことになったのであるから。

註

- (1) 今回大会の統一テーマ「祈り」は、二〇〇四年十二月に毎日新聞に掲載された「祈り公認 浄土真宗本願寺派」という記事に端を発した浄土真宗と祈りの問題に基づくものと思われる。

- (2) 棚次正和著『宗教の根源―祈りの人間論序説―』世界思想社、一九八八年、一九頁。
- (3) 初期無量寿経である『大阿弥陀経』と『平等覚経』との三輩段の文はほぼ同文である。この論文では文献学的にもつとも古いとされる『大阿弥陀経』による。ただし初期無量寿経では「願生」ではなく、『大阿弥陀経』では「願欲往生」、『平等覚経』では「欲願往生」である。
- (4) 『真宗聖教全書』一、二四頁
- (5) 同二四頁
- (6) 同四三頁
- (7) 同六一頁
- (8) 三輩が平等に往生する原理として、曇鸞は三輩章の「発無上菩提心」の語に注目し(『論註』)、源空は三輩章の「一向専念無量寿仏」という語に注目した(『選択集』)。
- (9) 『真宗聖教全書』一、四三頁
- (10) 同四四頁
- (11) 『西方指南抄』『昭和新修法然上人全集』二二三頁
- (12) 『真宗聖教全書』一、三三九頁
- (13) 右同
- (14) 同三〇七頁
- (15) 同三六五頁
- (16) 同三六九頁
- (17) 『撰大乘論』国訳一切経瑜伽部八、四五頁。

